

モーセ (1964年) (現代と教会新書)



出版: 日本基督教団出版部
著者: フォン・ラート
ページ: 125

「あとがきに代えて」より

一般に、フォン・ラートのこの書物を読みはじめたひとびとは、一種の不安にかられたのではないかと想像します。

旧約の物語は一気に書き下ろされたものではない。出来上がるのに長い年月を要した。のちの時代のひとびとは、自分たちの理解にもとづいて、新しい事柄を物語に付け加えた。モーセの場合も同様で、現在われわれが聖書の中に所有するモーセについての物語は、後代の信仰を反映している。

こういう書き出しに、読者は、最近の聖書学のいわば危険な傾向を察して、はじめから警戒したのではないのでしょうか？

さらに著者は言い切ります。

「ということは、われわれはモーセの完全な伝記をもっていないということを意味します。まして『厳密な歴史科学』の立場で書かれたかれの記録を全く持っていません。」

モーセは実在の人物ではなかったのか。著者はモーセを架空の存在とみなして、この書物をするしているのか、とわれわれの不安は飛躍します。

しかも、そういう聖書の学問は、イエスの歴史的存在性をも否定する傾向に通じる。近代以後の科学主義があやまって聖書に適用された結果、キリスト教信仰の中心がおびやかされている、とモーセの問題をそのままイエスに結びつけて考えやすい。...（以下画像の「あとがきに代えて」参照）

<https://rapidgator.net/file/d0437c35a8064ace440699a4258c3026/jUvY7Q8vj.pdf.rar.html>